

北九州
通巻No.76

北九州に強くなろうシリーズ
No.10

平家あわれ、源氏かなし

源平合戦「壇ノ浦」

お話

作家

古川 薫 氏

相愛大学 人文学部教授

砂川 博 氏

聞き手

元福岡シティ銀行 常務取締役

石橋博光

対談 平成10年3月



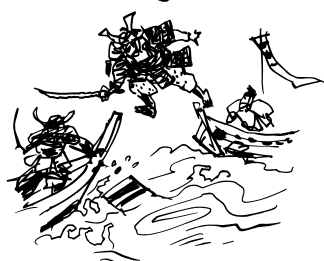
ココロがある。コタエがある。

西日本シティ銀行

<http://www.ncbank.co.jp>

平家あわれ、源氏かなし

源平合戦 壇ノ浦



・標題、イラスト 西島伊三雄

その①

中世の窓をあけた
天下分目の海戦

お話 作家

聞き手

元福岡シティ銀行常務取締役

古川 薫氏
石橋 博光

壇ノ浦は
歴史と
景観の舞台



司会 先生は関門海峡のほとりにお住まいですね。

古川 八百年前に、この海峡の壇ノ浦で源氏と平家の最後の、合戦があつたのだと思うと感慨が深いですね。

日本歴史を振り返ると、天下分け目の東西合戦が三回あるんです。

第一回は源平合戦、第二回は四百年前の関ヶ原合戦。第三回は百三十年前

の明治維新です。前二回は東軍の勝ち。維新だけは西軍が逆転勝ちをしている(笑)。

明治維新では、激動の幕開けにここで長州藩が、お粗末な大砲でアメリカ・イギリス・フランス・オランダの四国艦隊と攘夷戦争をやっている。それから時代がうねりが大きく変わって討幕へ。明治維新の大きな転換でした。

源氏の勝利は古代の摂関政治から中世の武家政治へ。関ヶ原は江戸幕府の近世へ。明治維新は近代への幕開けでした。

壇ノ浦は、源平合戦はロマンとしてだけではなく、こうした史観でとらえ

る必要がありますね。

石橋 すると、日本変革の三つのできごとのうち、関門海峡はその二つにかかわっている。そして、壇ノ浦にしばらくはハイライトは源平合戦ですね。

古川 幕末の攘夷戦はまだ生臭くて完全な過去にはなっていない。源平合戦はすでに風化して、極彩色の絵巻物の感じですね。

今から約八百年前の、**寿永四年**(一一八五)三月二十四日、平家の軍船が海峡の田野浦に集結して源氏の軍船を激撃します。

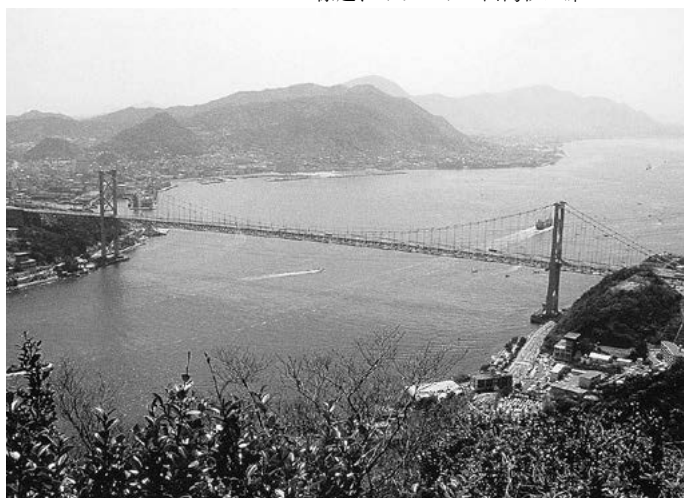
海峡は満潮と干潮によって、約三時間おきに昼夜四回、西の響灘と東の周

防灘の水位が変わり、潮流が西流れと東流れの激流に変化します。

大潮で時速八ノット、小潮で五ノットの激流ですが、変わり目には静止状態になって、次は反対に逆流するのです。

※ノット knot 船舶や海流の速度の単位。一時間に二海里(二八五メートル)が一ノット。

その激流を九州北端に突き出た門司半島がさえぎって、東ふところは比較的に水面のおだやかな田野浦です。平家はこの田野浦に兵船を集め東からの源氏の船を待ち受けて、乾坤一擲の最後の決戦に挑むのです。



眺望 壇ノ浦

下関の火の山公園や、門司の和布刈公園から見下ろせば、源平の古戦場が一望ですね。

清盛が内海を国際航路に



石橋 日本歴史を分ける重要な合戦が、なぜここで行われたのでしょうか。

古川 関門海峡が本土と九州の結接点という地理的条件があつて、必然的に日本歴史の重要な舞台に登場したのである。

いまひとつのポイントは古来から九

州が日本史のエネルギーの倉庫だったことです。

石橋 人的資源、物産。さらに博多という外来文化の窓口がある。九州の持っているエネルギーを、中央政府が吸い上げようとしたのです。

古川 古代には大宰府、室町幕府になると九州探題をつくるでしょう。九州を重要視しているのです。

※九州探題 九州の政務・訴訟・軍事をつかさどった。

そして京都と九州をつなぐ大きなパイプの瀬戸内海を通して、人と情報と物産が盛んに往来していたのです。

司会 平家が源義経（一一五九―一二一三）の急襲で摂津（兵庫県）の一の谷と讃岐

（香川県）の屋島で敗れる。頽勢を挽回し、京都を回復しようという起死回生の最後のカードが壇ノ浦合戦だったのです。

古川 平家がなぜ九州を頼りにしたかというと、平清盛（一一一八―一二一八）の父の忠盛のころから、平家は九州と深い縁があったのです。

忠盛は身分は刑部卿ですが、白河院の莊園である肥前神埼荘の莊司（管理者）になって下つてくる。

※刑部卿 訴訟の裁判、罪人の処罰をつかさどる役所の長官。

※莊園 平安から室町時代にかけての貴族の領有地。鎌倉幕府成立後、武家に侵略されて衰退。

そのころ博多には宋の船がさかんに交易にきている。利潤が大きいので彼は宋貿易にのりだす。平家が急激に勢力を伸ばしたのはこれからで、博多を平家隆盛の基盤にしたのです。

石橋 だから息子の清盛も。

大宰大貳（律令制の）から、太政大臣となり中央の実権を握った清盛は、瀬戸内海航路の開発に力を注ぎます。

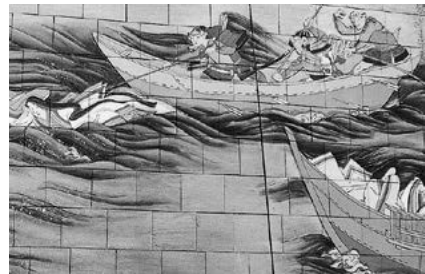
広島湾倉橋島の音戸の瀬戸を切り開いたという伝説もあります。宮島の厳島神社を修復していますが、瀬戸内航路開発の一環でもあったでしょう。

※太政大臣 律令制の最高長官

※平清盛（元永元―養和元―一一八二―一一八二）

保元・平治の乱後、源氏に代つて勢力を得、従一位太政大臣。娘、徳子は高倉天皇の中宮、皇子が安徳天皇で、外戚として勢力を誇ったが、没後数年で平家が滅亡。

※本文掲載の絵図は和布刈公園の陶板レリーフより



身を投げた建礼門院と源氏の兵

司会 福原遷都もそのラインで。

古川 そうです。清盛が治承四年六月、天皇、法皇、上皇を奉じて福原（神戸市兵庫区）へ遷都をはかり、大輪田泊（神戸港の古名）の修築を手がけますね。だが、延暦寺の僧兵の要請や、富士川の敗戦などで、わずか半年たらずで、同年十一月京都へ還らざるをえなかった。

でも都を陸の奥にある京から国際航路の内海の港にと、清盛は国際感覚のある人だったのです。

そのころは、天智天皇と藤原鎌足の「大化改新（六四五）」から五百四十年たつていて、律令政治が機能しなくなっています。それを守ろうとするのが平家で、いわば保守政権である藤原氏の備兵隊長だったのです。

それを打ち壊そうとしたのが、関東の新興勢力である源氏です。律令政治が有名無実になったので、地方の官僚や豪族は自衛のために次第に力を蓄えてきます。いわゆる武士の登場で、その棟梁が源氏です。

この大きな時代変化のうねりを象徴するのが源平合戦で、そのとどめが壇ノ浦でした。古代の摂関政治の幕を閉じて、中世の武家政治を開く新旧勢力の決戦だったのです。

司会 平家は古代に殉じたのですね。壇ノ浦の哀れがさらに深まりますね。

エネルギーの倉庫九州



石橋 九州で敗勢を挽回するパターンは、百五十年後に、源氏の流れである足利尊氏も踏襲していますね。

古川 尊氏（一三〇五―一三五八）は後醍醐天皇を擁する楠木正成、新田義貞等に敗れて九州に逃れますが、勢力を挽回して京都を回復し足利幕府を創設しています。

だから、昔から火の国九州はエネルギーの倉庫だったのです。そうした背景で源平合戦のフィナーレを飾る壇ノ浦合戦が行われたのは、極めて興味深いものがありますね。

浦合戦が行われたのは、極めて興味深いものがありますね。

地政学という分野がありますね。政治現象と地理的条件を総合して、政治は地形や自然によって大きく影響されるといふ説なんです。源平の決戦もある必然をもつて、壇ノ浦で行われたと言えるでしょうね。

司会 もし、平家が勝っておれば。

古川 古代の摂関政治がしばらく持続したでしょう。でも、律令制度がほころびてしまっているから、長くは続かなかったでしょう。

司会 日本史の転換は、たしかに源平合戦、関ヶ原合戦、明治維新と、東西対決の歴史なんですね。

敗因は源氏の大將が義経だったこと



司会 平家の悲運の初めは、**木曾義仲**に敗れて、京を落ちてからですね。

※木曾義仲（久寿元一寿永三・一一四一―一一八四）源義仲・頼朝と従兄弟。治承四年挙兵。平家を西海に走らせ征夷大將軍になったが、範頼・義経に敗れ敗死。三十一歳。

古川 幼帝**安德天皇**を奉じて、寿永二



石橋 博光

※源頼朝（久安三―正治元・一一四七―一二九九）武家政治の鎌倉幕府の創始者。平治の乱で伊豆に流されたが、反平家の兵を挙げ、鎌倉で東国を固め、弟の範頼・義経に平家を討滅させた。征夷大將軍。範頼、義経、功臣を殺し、死後、権勢が北条氏に移った。

年（一一八三）七月に九州の大宰府へ落ちます。

しかしそれもつかの間で、豊後の緒方維義が謀反して攻めてくる。それで筑前遠賀郡芦屋の山鹿秀遠を頼ります。ここも危いので、海路豊前の柳ヶ浦（現・北九州市門司区）に移ります。

石橋 JR門司駅から一キロぐらいのところで、今の大里ですね。

大里の御所神社は、このとき安德天皇の行在所がもうけられたところで、大里はその内裏に由来すると言われていますね。

古川 義仲と源頼朝が源氏同士で戦っている間に、四国の屋島で、平家が勢力を回復します。行宮を讃岐の屋島へ移し、京都奮闘のために兵を福原へ進めて摂津の一の谷に陣を張るのです。そこを義仲を敗死させた義経が寿永三年二月に一の谷を奇襲します。敗れた平家軍は、総大將の平宗盛がひき

いて讃岐の屋島へ退陣する。

弟の平知盛は陸路をとって西へくんだり、周防、長門を抑えます。しかし、源氏の源範頼の軍に追われて、平家の知行地である海峡西口の彦島に下り、本陣を構えます。

海峡の東は今の関門大橋の門司側の橋脚がある古城山（高一七五メートル）で、ここに砦を築いて門司関を固めます。門司六郷を支配している門司関の別当（長官）は、平家の息がかかっている大宰府の管轄です。

一方、翌、寿永四年二月、義経の急襲で敗れた平家本軍の宗盛は、屋島をすてて海路彦島の知盛の軍と合流します。

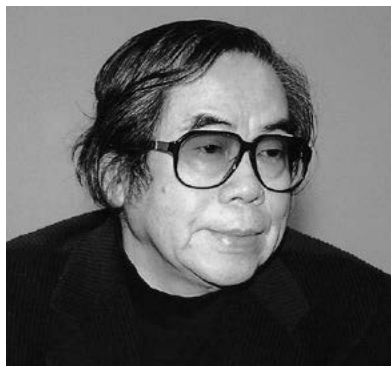
こうして平家は関門海峡の制海権を確保し、全軍を結集して、源氏の襲来に備えたのです。

石橋 二年たらずの間に、目まぐるしい平家の逃走ですね。そして、いよいよ決戦の壇ノ浦合戦ですね。

古川 約八百年前の寿永四年三月二十四日、新暦に直すと五月若葉のころです。陸の長門には追討の源氏軍、背後の豊後には平家に反旗をあげた緒方三郎や臼杵二郎の兄弟を迎えられた源範頼がいる。平家はここを失えば逃げ場所がない。最後の決戦と覚悟しての白昼堂々の対戦だったでしょうね。

石橋 地元の豪族たちは……。

※行在所・行宮 天皇行幸のときの仮の宮。



古川 薫氏

古川 西国は平家の地盤ですが、源氏が連勝しているので、去就に迷ったでしょうね。

平家側には大宰権少弐の原田種直や兵船五百艘を率いる遠賀川河口の山鹿秀遠、水軍の松浦氏、菊池氏らがついています。本土の方は周防の大内盛房、長門の厚東武光の態度が曖昧です。

屋島の戦いから壇ノ浦までの約一ヶ月の義経の行動が謎で記録がない。河野水軍や熊野水軍ら内海の豪族に、味方につけば御家人にとりたてると勧誘していますが、大内にも厚東にもうまく謀報工作をしたのでしょうかね。

大内氏は兵は出さないが、周防の船所政利（船奉行）が二十四艘の船を供出しています。これまで平家側だった二天勢力が消極的支援をとったのは義経の謀略でしょう。義経は槍戦や船戦

に長けていただけではなく、たいへんな戦略家だったのです。平家の悲運は敵の大將が義経だったことでしょね。このとき義経に長府櫛崎を根拠地とする水軍が十二艘の早船「櫛崎船」を献上しています。

櫛崎船は造船史にも出てくる船足の速い船で、義経はこれに乗って、急流の関門海峡で、縦横に指揮をとったのでしょね。

軍船千三百艘 軍兵一万人が 海峡で戦った

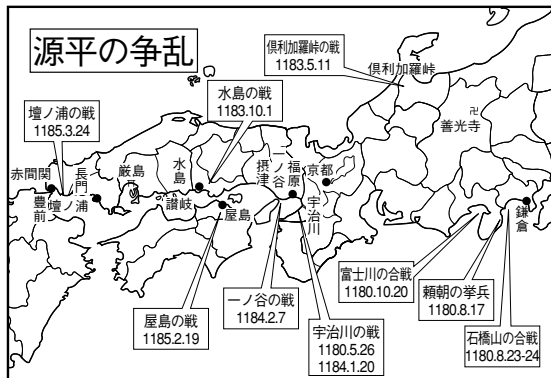


石橋 戦いに参加した双方の兵船は古川 鎌倉幕府の史書である『吾妻鏡（東鑑）』によると平家が五百余艘、源氏が八百四十余艘となっています。

しかしそれはありえない。海戦直前の勢力は平家が山鹿、菊池、松浦などの強力な水軍を擁して八百艘、源氏五百艘と平家が優勢でした。

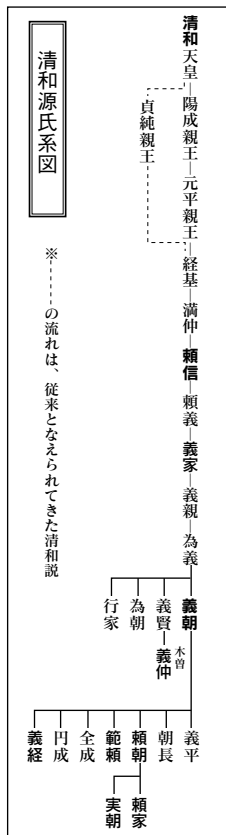
一の谷でも屋島でも、源氏が平家を取り逃がしたのは、平家が源氏をはるかに上回る水軍をもっていた、源氏は追撃の水軍をもっていなかったからです。

『平家物語』によれば合戦の途中で、四国の阿波民部大夫の軍船三百艘が寝



(注) 1180.5.26/源頼政が平家に敗死、1184.1.20/木曾義仲が範頼・義経に敗死。

返りしたからとなっていて、これで平家の軍船が最初は源氏を圧倒していたことがうなずけます。だいたいの説が、緒戦での源氏優位説を取っています。司会 『吾妻鏡』には壇ノ浦合戦の捕虜の中に民部大夫の名があるそうですが、古川 むつかしいところですね。四百



年前の関ヶ原合戦は資料が残っているが、八百年前の壇ノ浦合戦ははっきりしない。矛盾した資料も多い。八百年は、物語になる年月なんですね。

私は、優勢だった平家が負けた理由は、『平家物語』にあるとおり、民部大夫が合戦の途中で、源氏に寝返ったからだと考えています。

一の谷で子息が源氏の捕虜になり、その不憫さから裏切ったのです。これも義経の謀略だったでしょうね。

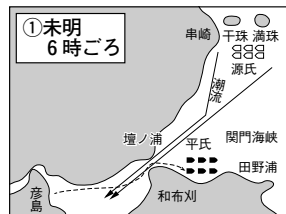
石橋 軍兵の数は。

古川 源氏が三、四千。平家が四、五千ぐらい。これも民部大夫の寝返りで逆転しています。両軍合わせて一万人船千三百艘がこの狭い海峡で血みどろの合戦をしたのです。

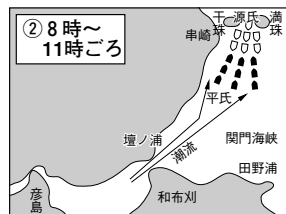
平家軍の指揮をとった平知盛は全軍を三手にわけ、山鹿勢五百艘を先陣に、松浦勢三百艘は中堅、安徳帝はじめ平家の一門をのせた二百艘を後陣にして、田野浦から源氏に迫るのです。

石橋 悲壮な情景が目には浮かびますね。

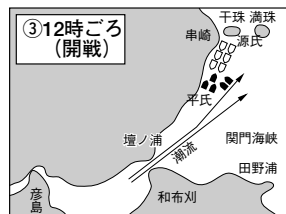
源平壇ノ浦合戦 (1185年3月24日)



平氏は源義経、範頼を迎えて、決戦を得意の海戦に求め、全軍彦島を出て田野浦に集結した。平氏五百余隻、源氏八百余隻。



平氏は東流れの潮を利用して、九州勢を先陣に、三手に分かれて満珠・干珠に進撃し、源氏を包囲せんとした。



海戦にたけた平氏は源氏を圧倒した。源氏は潮流の変わるまで時をかせがんと、死力を尽して防戦した。平知盛は源義経を求め、中央突破をはかったが果たせなかった。



やがて潮が変わった。西へ流れる急潮に平氏と源氏は攻守どころを変えた。攻撃に移った源氏は平氏の手手や舵取りに矢をあげて船の自由を奪った。激闘数刻、平氏はついに壇ノ浦に滅びた。

戦いは何時ごろから。

古川 これがまた、夜明け前説、早朝説、正午説と諸説紛々なんです。

ただ摂政・関白を歴任した公家の九条兼実（一一四九—一二〇七）が四年間書きのこした日記『玉葉』に『午正より晡時に至る』と書かれている。午の刻は正午で、晡時は午後四時です。これが一番正確だろうと思います。

これに大正時代の東大教授だった黒板勝美さんが注目された。幸いに当時の月食の記録を手がかりに、正確な月齢を割り出して、海軍水路部の協力で合戦が行われた三月二十四日（新暦では五月）が大潮の日であったことを調べられたのです。

潮の流れが初めは平家、後は源氏に有利に働いたという『潮流説』を大正八年に『歴史と地理』に発表。『義経伝』にまとめられて、広く世間に知られるようになったのです。



平 知盛肖像

石橋 それで、両方の軍船の位置は。古川 平家の軍船は田野浦の沖に、一方の源氏は長府の沖の満珠・干珠という小島、あの辺に集結していたようです。石橋 潮流をよく知っていた平家は潮の上手にいたのです。

古川 東流れの潮が最高速度時速八ノットの十一時過ぎをこえた正午ごろ、平家は追い潮にのって源氏に三町（三百メートル）の間合いに迫り矢合わせを戦端に攻撃をかける。緒戦は潮にの

つた平家が優勢でした。

平家優勢のうちに午後三時ごろ潮の流れが止まり、西流れに変わる。今度は源氏が好機到来と、逆流した

追い潮にのって平家軍を西へ追撃する。潮の流れが速さを増してきた午後四時頃、攻守ところを変えた源氏の猛攻に平家は壇ノ浦で敗北するのです。勝敗を決した激戦は、約一時間ぐらいたったでしょう。

石橋 潮の上手も下手もたいして変わらないように思うのですが。

古川 潮に乗った両軍の相対的速度は同じですからね。海上保安大学の金指正三氏もそのように指摘されたが、「流速は微弱にせよ、流れに乗った源氏が有利」と潮流説を否定されてはい

ない。いずれにしろ八百年間、多くの人が潮の流れに平家の哀れを

感じているのですから、私はまあそれでいいじゃないかと（笑）。石橋 絵巻物の世界ですからね（笑）。

“平家急潮に滅ぶ”に？



古川 こうして『平家急潮に滅ぶ』が定説だったのですが、十年ぐらい前から異論がでてきたのです。

黒板さんは潮の最高速度を一時間八ノットから十ノットとしているのですが、開門海峡の流れは大潮小潮があつて、毎日八ノットの早さではない。この頃はコンピュータでびつくりするような計算ができるでしょう。

気象学者の荒川秀俊さんは壇ノ浦合戦の日は小潮で、平家の敗戦が決定的となった午後四時ごろの潮流は、〇・六ノットだと。〇・二ノットという説もありますね。

石橋 大きな違いですね（笑）。古川 関門船舶事務所の山下通航潮流事務所に聞いてみると、関門の潮流には、流れがゼロになる片瀬が、大潮小潮に関わりなく、月に一度か二か月に一度ある。その日が片瀬かどうかは、八百年昔のことで確かめるのは不可能

だそうです。

平家の敗亡は急潮のためだけではな
い。民部大夫の裏切りに加えて、もう
一つは義経の作戦です。義経が巻き返
しを図って、平家の船を動かしている
楫取や水夫を弓で射させたのですね。

そのころの船は、漕ぎ手の水夫が舳
の外に突き出た船梁に渡した板（船樁）
の上にのって、むき出しで櫓を漕いで
いたのです。兵船は囲いでせがいを保
護してあるが、徴収した運搬船は無防
備なので、水夫が次々に弓で射られる。

楫取や水夫を失った船は勝手がきか
ず、彦島陣地へ逃れることもできない。
下関側に流されると陸の源氏から矢を
あびる。散々ですね。

石橋 平家と同じ戦法をとれば。

古川 混乱の中では、指令もゆきとど
かなかったのでしょうか。

石橋 源氏の勝ちとなつて、地元の家
族たちは。

古川 平家に加担した原田氏、山鹿氏
らは所領を没収される。鎌倉幕府が派
遣した守護時代を迎えることになつて、
摂関家の荘園も有名無実となつてしま
うのです。

源氏が勝つて、幕府が各国に関東の
御家人を守護職としてはりつけます。
薩摩の島津、豊前・豊後の大友、周
防・長門は佐々木などで、戦国時代ま

での西国地図がおおかたできるので
司会 義経の末路も哀れですね。

古川 義経は頼朝が命じた侍大将の梶
原景時とそりが合わない。景時の讒言
で、頼朝は功名の華々しい義経に猜疑
心を抱き出す。

後鳥羽上皇がさらに一の谷の急襲で
ヒーローになった義経を引き立てられ、
検非違使に任じて昇殿を許される。
これが裏目に出て、頼朝は自分に相談
もなくそれを受けたと立腹するのです。

※検非違使 京中の違法をとりし
まる長官。追捕、訴訟、行刑にあ
たり、今の警察官と裁判官をかね
た絶大な権力をもった。

義経は頼朝の怒りを解くために一死
を覚悟して奮戦したのでしょう。



義経の八艘飛び

だが頼朝
の怒りは解
けず、華々
しい栄光に
包まれた義
経が流転を
重ね、つい
には身を託
した奥州の
藤原家にそ
むかれ、衣
川の館で命
を絶つので

す。

義経を討伐した頼朝も、二代頼家、
三代実朝が悲命に倒れ、二十一年た
らずで北条政権になるでしょう。

石橋 哀れですね。

古川 滅びるものは、美しいですよ。

『平家物語』は滅びていくものへの哀
惜でしょうか。諸行無常に全てを
尽くしていますね。

司会 そして作者もわからない…。
古川 それでいいんですよ。

見るべき程のことは 見つ



古川 八歳の幼帝、第八十一代の安
徳天皇も「浪の下にも都のさぶらふ
ぞ（ございます）」と二位の尼（清盛）
に抱えられ、三種の神器の宝剣
（草薙剣）を腰に、神璽（八坂瓊勾玉）
を脇にはさんで入水して果てられる。
幼帝を抱いていたのは按察局だとい
う説もあつて、平家滅亡の哀史ですね。
司会 そうして三種の神器も海に。

古川 三種の神器は皇位継承に欠かせ
ない宝物だったので。神璽は海中に
箱のまま浮いていて、神鏡（八咫鏡）
は御座船に残っていた。宝剣だけが海

に沈んだのですね。

天皇の母君、高倉天皇の 中宮、建
礼門院徳子（久寿二・建保元）は源氏の
兵にひきあげられ、余生を京の大原の
寂光院で、安徳天皇と平家一門の冥福
を祈ってさびしく過ごされる。

※中宮 平安時代以降は皇后、ま
たは同資格の正后の称。

総大将の宗盛も哀れで、子息清宗と
生け捕りにされ、頼朝の尋問を受けて
近江で斬首されています。

石橋 平家の落日をかざる話は。

古川 救いは、平教経と知盛ですね。

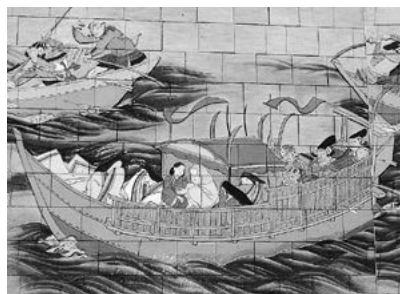
清盛の弟、教盛の次男平教経は、屋
島の戦いで武勇で知られていた義経の
家来の佐藤経信を豪弓で射殺し、壇ノ
浦では義経を追ひ回します。

義経がそれをのがれて、「八艘飛び」
の伝説になったのでしょうか。

いよいよ最期を迎えて、怪力無双と
いわれる源氏の安芸・太郎兄弟を抱えて
入水している。平家一の豪の者ですね。
私が『平家物語』で、いちばんすば
らしい場面と思うのは、平家軍を指揮
した平知盛の最期ですね。

戦いにあたり、「各命をこの時に失
いて、必ず名を後の世に留めよ」と全
員を叱咤激励しています。

そして奮戦の後、「見るべき程のも
のは見つ。いまは何をかせせん」と



安德天皇の御座船

乳母子の伊賀家長とともに鎧を二領ずつ着て入水したとあります。

作者が知盛の口をかりて言わずにはおれなかった言葉、『平家物語』の真髓ですね。

一の谷では、父の危機を救い身代わりになった子息知章を、見殺しにせざるをえなかった。修羅場の壇ノ浦の戦いを終わって、最期のときを迎えた知盛が、栄光も悲哀も、源氏の奢りも平家の悲しみも、人の世の哀れをすべて見たと。大きな達観ですね。

確かに知盛はすべてを見たのですね。壇ノ浦合戦の大きなピリオドを彼は打っているんですね。

司会 いいお話で終わらせていただきましょう。ありがとうございました。

その②

いつ書かれたか、誰が書いたか 『平家物語』の哀れ…。

お話
聞き手

砂川 博氏
元福岡シティ銀行常務取締役
石橋 博光

今の 「壇ノ浦」ではない



司会 「壇ノ浦合戦」ですが、八百年前の壇ノ浦は今のところじゃないそうですね。

砂川 戦場は干珠、満珠の島あたりで長府の前の海でした。当時、長府は長門の国府があったところですね。

源平合戦の約五百二十年程前に百済が中国の唐と新羅の連合軍に攻略されます。百済の救援に、中大兄皇子

(後の天智天皇)が朝鮮半島に援軍をおくりますが、白雉二年(六六三)に白村江の戦いで惨敗しますね。

そこで大陸からの侵攻が懸念され、それに備えて大宰府に水城や、大野城に朝鮮式山城を築き、西国に軍団を配置して防備にあたります。

遠賀川の河口におかれたのが遠賀軍団、志賀島におかれたのが志賀軍団で、

長府にも軍団が置かれます。前が海だから軍団の浦。その「軍」がいつの間にか落ちてダンノウラ、壇ノ浦になったのだと言われています。私はこの説をとります。

山がすぐ海に迫っている海峡部の今の壇ノ浦では、多くの兵士を駐屯させることはできないでしょう。当時の団の浦は、今の壇ノ浦よりずっと東だったのですね。

石橋 それに、今の海峡の狭い壇ノ浦では、源平の千三百艘が戦うことはできませんね。

砂川 面白いのは壇ノ浦があちこちに あることです。『平家物語(延慶本)』には、一の谷や屋島にも壇ノ浦が見えます。

石橋 普通の地名だったので……。砂川 平家滅亡の悲話で、琵琶法師の語りで全国津々浦々まで知られるようになって、ほかの壇ノ浦は霞んでしまったのでしょうか。

石橋 壇ノ浦が源平合戦のフィナーレとなる伏線は、平家が九州に縁が深か

相愛大学 人文学部教授

元福岡シティ銀行常務取締役

つたからですね。

砂川 九州との縁は、清盛の父、忠盛の時からで、すぐ近くの長門の国司は清盛の三男の知盛ですね。

地元水軍の遠賀郡芦屋の山鹿氏や大宰府の原田種直はよく平家に尽くし、壇ノ浦合戦でも、最後まで奮戦しています。

幼帝、安德天皇の 柳ヶ浦御所 能「清経」の舞台



石橋 豊前の柳ヶ浦に設けられた御所のあとが、北九州市門司区の御所神社だと言われていますね。

砂川 その御所が宇佐市の駅館川の河口あたり、旧、柳ヶ浦町だと言う人もありますが、私はまちがいなく門司の柳ヶ浦だと思っています。

平家物語に、柳という所に御所をつくらうとしたが、狭い所なのでとりや



砂川 博氏

めたとあります。

石橋 宇佐は広々としていて、この記述に合いませんね。

砂川 そこで門司説なのですが、室町時代前期に今川了俊という武将がいました。文学にも通じていたインテリ武将ですが、応安四年（一三七二）に九州探題となつて博多へ赴任します。その道中記を『道ゆきぶり』という手記に残しています。

赤間関（下関）の火の山まで来たときに彦島を見て、「この島の向かいには柳の浦とて、昔内裏のたちたる所なるべし。いまはそこを内裏の浜ともいふなり」と記しています。

壇ノ浦合戦から二百年ぐらい後ですが、柳ヶ浦に内裏があつたと伝承されていたのです。今川了俊は門司の歴史の立派な証人です。

砂川 平家物語との関連で言いますと、ここで平重盛（清盛の長男）の三男の平清経が入水自殺しています。

いわゆる世阿弥がつくった能の名作『清経』にこの間の事がよく窺われますね。

清経は妻に必ず迎えにくるからと言いつつ都を落ちますが、平家の行く末をはかんで柳ヶ浦に身を投げます。

家来の淡津の三郎が京へのぼり、清経の北の方（妻）に形見の遺髪を届けてその次第を伝えます。そして北の方の夢の中に清経の霊が現れます。

北の方は、いつかは迎えに来るといいますが、自分一人先に死んでしまったのは、恨めしいと嘆きます。

清経は、月夜、柳ヶ浦に舟を出し船首に立ち上がつて横笛を吹き、入る月に極楽往生を祈りながら身を投げたと語ります。妻ははかない契りを嘆きながら、現世も来世も悟れば同じだとの清経の言葉に安らぐのです。

ストーリーは岩波文庫の『平家物語』でわずかに四行の記述です。それをふくらませたのが『源平盛衰記』、さらに夫婦愛をテーマにふくらませたのが能の『清経』です。

石橋 今いちばんポピュラーな演目で、時代相にふさわしい能ですね。

砂川 江戸時代には男らしくないとい

て、上演が少なかったようです。

清経供養の五輪塔が、柳の御所の跡と言われる御所神社からちよつと西に昭和三十年頃まであつたそうです。地元の人たちが、花や線香を供えていたようですが、今は跡形もありません。残念ですね。

ところが、大分の柳ヶ浦では駅館川の河口に「清経」の五輪塔があり、今も香花が絶えません。

ところで幼帝安德天皇の母君、建礼門院徳子（清盛の娘）は壇ノ浦で入水しますが、源氏の兵に引き上げられて、余生を大原の寂光院で寂しくおくります。そこで在りし日を回想して、平家滅亡に至る最初の悲劇は清経の死だと言っているのです。

当時は、関東に源頼朝、京都に源義仲、西には平家と天下三分の形勢で、まだ平家挽回の可能性があつたのです。そこへ嫡流の清経が平家の行く末をはかんで身を投げた。平家一門にはショックだったでしょうね。このように門司には平家ゆかりの柳ヶ浦があるのです。御所神社もあることですから、門司の方々にも少し関心をもつてほしいですね。

源平ともに 軍事貴族



石橋 源氏も平家も、もともと貴族ですね。

砂川 平家の先祖は第五十代桓武天皇。源氏の先祖は通称第五十六代清和天皇と言われていますが、実は第五十七代陽成天皇が直接の先祖です。平家も源氏も、天皇家にどれだけ近い血筋であるかということで、家柄が決まっていた。

石橋 じゃ、軍事貴族だった。

砂川 そうです。源氏は八幡太郎義家が出て、前九年の役、後三年の役で、安倍氏の叛乱と清原氏の内紛を鎮めました。いわゆる武士の登場で、彼ら軍事貴族が、次第に力をつけていく端緒でした。

石橋 源氏は関東武士、平家は瀬戸内海や九州の水軍を手なづけたのですね。砂川 清盛の父忠盛が大宰少貳（大貳に大貳に）清盛と弟の頼盛が大宰大貳（大貳に）なつて日宋貿易の拠点である博多を抑えますね。

忠盛と頼盛は赴任しますが、清盛は遥任といって現地赴任はしないままで

した。こうして平家は日宋貿易で利益をあげたのです。

石橋 その富と利権で、内海や九州の水軍を掌握して宋から京の都までの交易ルートを抑えこんでたんです。

砂川 それで「平家でなければ人にあらず」とまで言われた一門栄達の財力をきずいたので。

清盛の父の忠盛は、鳥羽法皇のために、今の三十三間堂と同じ規模のお寺を、一千一体の御仏とともに寄進しています。見返りに昇進していますが大変な財力です。

石橋 財力と武力をもった軍事貴族の登場ですね。

砂川 いわば古代から中世への幕開けを、平家が準備したのです。

石橋 源平合戦といっても、平家の血に繋がる者が源氏の陣営にいて、どうもわからない。

砂川 お家大事。どちらにつけば有利かだったのでしょうか。

『平家物語』の冒頭、祇園精舎の段にあるように、平安京を開かれた桓武天皇のお孫さんにあたる高見王の子の高望王、この人が上総の国に土着して平家の先祖になるのです。

子孫が次第に枝分かれして、関東八平氏となる。千葉、上総、三浦、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾と。

司会 みな頼朝の重臣ですね。

砂川 平安中期に藤原道長に仕えた知勇兼備の源頼信のときに平忠常を押さえ込んで、それ以来関東の平氏が源氏の傘下に入るのです。

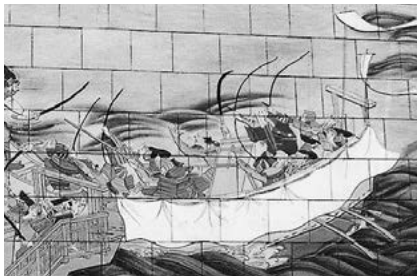
頼信、頼義、義家と、武士たちに尊敬された三代の名将が、源氏の基盤をしっかりと築いたので。

石橋 平家本流は。

砂川 平安中期に平維衡が伊勢の国に移住しました。これが伊勢平氏で、後の平氏の本流になるのです。

石橋 源氏は地味な積み上げで東国武士団を味方にした。平氏は当時の世界貿易に目を向けて先端を走ったが源氏に敗れる。対照的ですね。

砂川 関東八平氏に推されて源氏が、西国平氏を破って天下をとったのが源



平合戦の実態で、その締めくくりが壇ノ浦でした。

司会 その源氏が、頼朝を助けた北条氏に実権を奪われてしまう。

砂川 北条は平氏です。因果はめぐるですね。

最後のカード 壇ノ浦合戦



石橋 壇ノ浦までの、源平の合戦は。

砂川 最初の直接対決は富士川の合戦です。治承四年十月二十日、平家は夜半にいつせいに飛びたつた水鳥の羽ばたきを源氏の急襲と勘違いして、慌てふためいて退却します。

次は木曾義仲との寿永元年（一一八二）六月の横田河原（後の川中島）の戦い、そして翌、寿永二年の北国の倶利伽羅峠の戦い。どちらも義仲のゲリラ作戦と奇襲で敗れています。

その義仲が頼朝に敗れ、義経と平家の戦いとなる。寿永三年（一一八四）二月に一の谷合戦があつて翌年の寿永四年の一月に四国高松の屋島の戦いです。

石橋 どれもみな敗れている。
砂川 寿永二年十月に、義仲を備中

（岡山県）の水島合戦（現在の倉敷市）で破っていますが義経との陸地戦は完敗ですね。屋島も海戦と言うよりも陸地戦です。陸で負けて海に浮かんだのですから。

最後の決戦を小倉平野でやれればと思うけれども、当時は内陸部まで海でしたでしょうし範頼を擁した緒方勢が背後の豊後にいるから無理。

それで平戸の松浦水軍、遠賀川河口の山鹿水軍、阿波の水軍を率いて壇ノ浦での乾坤一擲の海戦となったのです。
石橋 源氏の方は。

砂川 河野水軍が兵船百五十艘、平家重恩の熊野水軍が兵船二百余艘で加担して、源氏水軍の劣性をカバーしています。

同じく平家物語によれば、熊野水軍を率いる熊野別当清増が、田辺（和歌山県田辺市）の新熊野権現（闘鶏神社）の神前で赤と白の七羽の鶏を闘わせて勝運を占い、白鶏が勝ったので源氏に加担を決めたことあります。

それに三浦水軍がいます。相模（神奈川県）の三浦半島に本拠をおく有力な水軍で、率いる三浦義澄や和田別当義盛は関東武士を代表する武者です。

石橋 九州まで、まさか船では。
砂川 『吾妻鏡』によれば、頼朝は合戦に先立つ三月十二日、兵糧を積んだ

兵船三十二艘を伊豆鯉名の沖などから出発させています。しかし兵船はほとんどが現地調達だったようです。

ところで周防の守備に当たっていたのは外ならぬ三浦義澄でした。

義経は出迎えた義澄に「汝は門司関を見る者なり。今、案内者と謂うべし。然れば先登すべし」平家物語と言っています。味方に水陸戦のベテラン三浦一族がいるのは心強かったでしょう。食糧や兵船は、長門の長府、周防の防府とそれぞれ国府を抑えて確保したのでしよう。

当時、周防、長門は飢饉で食糧調達が困難でした。義盛も食糧が乏しくて戦えない、鎌倉へ帰りたいと頼朝に訴えています。弓矢の戦のかげには補給をめぐる地味な戦いがあったのですね。司会 両軍とも補給と軍船確保の静かな戦いをして、壇ノ浦合戦になった源平のロマンが、急に現実感をおびてきますね(笑)。

石橋 熾烈なサバイバルだったのですね。それで平家は海戦に勝算をもっていたのでしょうか。

砂川 現実には源平ともに初めての海戦だったのです。平家は頼みの熊野水軍が源氏につきましたが、地元の水軍が味方だからまだ優勢と考えていたのではないのでしょうか。

ところが、阿波の民部重能の裏切りで形勢が逆転した。平家は山鹿、松浦阿波の三水軍で、その三分の一の阿波勢が激戦のさなかに裏切ったのですから致命的でしたね。

石橋 平家は一の谷、屋島と敗れても次の布石をきちんと打つていたでしょう。肥前の松浦党もいるし、壇ノ浦の次を用意しておかなかったのですか。砂川 面白い見方ですね。安徳天皇を奉じて、高麗や震旦(今の)へ亡命を考えた者もいたのではないのでしょうか。『玉葉』にも「旧主(安徳天皇)の御事分明せず」とあります。

石橋 宗盛親子が最後まで生きのびようとしたのは、そういう背景があったのでしょうか？

夏潮のいま退く
平家亡ぶ時も

和布刈神社境内の高浜盧子の句碑



宗盛親子と 重衡の あわれ



砂川 ただ宗盛という人はよくわからない。平家一門の人々が入水したり自害したりしている中で、船上でおろおろしていて、見苦しいと味方の侍に海に突き落とされる。だが水練が得意で、子息清宗と顔を見合わせながら泳いでいて、源氏の伊勢三郎に熊手で引き上げられてしまいます。

義経は二人を京に連れて行って車にのせ、都大路を引き回す。鎌倉で頼朝の尋問をうけてまた引き戻され近江で親子ともに首を打たれる。まことに哀れですね。

石橋 頼朝は清盛の義母、池の禪尼の口添えで助命されていますね。情をかけなかったのですか。

砂川 そこが頼朝のしたたかさですね。彼が平家一門のなかで徳としていたのは、池の禪尼の頼朝の助命願いに手をそえた平重盛と清盛の異母弟で母が池の禪尼の頼盛だけで、重盛はすでに死んでいます。

頼盛は、都落ちの時にひとり引き返して、助けられています。だから重盛

の子供たちにも助かるチャンスはあったでしょう。

しかし一の谷の合戦のあとで、重盛の長男の平維盛は、もはやこれまでと屋島を逃れ、熊野の那智の沖で弟の清経と同じく身を投げています。

だから、宗盛親子も命が助かるとは思っていなかったでしょうね。

石橋 相手は頼朝と義経で、総大将の器の相違が歴然ですね。

砂川 そうなのですが、清盛は亡くなる前に後白河法皇に使いを送って、自分が死んだ後はいっさいを宗盛に任せたいと言っているんです。

あの清盛が、一門を託すに足ると宗盛を一応認めているのです。それなりの人物ではあったのですが、滅びを合理化しようとした『平家物語』が、宗盛を弱将の象徴にしてしまったのではないのでしょうか。時の勢いも宗盛に味方しなかったようです。

ただ、知勇兼備の重盛が生きておれば、平家の命運は変わっていただろうと、誰もが思うのですね。

石橋 一番好きな平家の人物は。

砂川 宗盛の弟の平重衡です。

以仁王の令旨を受けて、源三位頼政が宇治で、平家に最初に反旗を挙げましたが、清盛にあつという間に鎮圧されますね。このとき奈良の興福寺の僧

兵たちが頼政に与しました。

清盛は妹尾兼康を送って説得させますが散々な目にあって戻ってきます。それで重衡を総大将にして、奈良法師たちを攻めます。そのとき配下の兵が示威のために、般若坂のあたりの民家に火をつけたのです。

季節が冬で北風が強く、あつという間に燃え広がって、東大寺も興福寺も大仏も、奈良の町々まで焼けてしまったのです。

重衡は一の谷の戦いで捕らえられて、いったん鎌倉に送られ、最後は仏敵として奈良の僧兵に首を刎ねられます。最後は「このたびの戦は天皇の命令で

あり、父の命令であった。どうして拒むことができようか。これが私の運命である」とはらはらと涙をながし、従容と死につくのです。

平家物語のエキスのような人物でその哀れさに魅かれますね。

石橋 興味あるお話でしたが、その根底でもある、『平家物語』、『源平盛衰記』、そして幕府の記録である『吾妻鏡』。この三つの位置づけは。

砂川 『平家物語』をさらに読み物風にしたのが『源平盛衰記』です。『吾妻鏡』は鎌倉幕府の公式記録で治承四年（一一八〇）から文永三年（一一八六）までの出来事を鎌倉幕府の側から記録

したもので、およそ十三世紀末から十四世紀初頭に編纂されたものと考えられます。

頼朝の石橋山挙兵のころは、『吾妻鏡』と『源平盛衰記』が類似している。それで『吾妻鏡』は平家物語のあ

るテキストを底本にして書かれたのだらうと言われているのです。壇ノ浦合戦の記録も参考にしたでしょうね。

そして、肝心の平家物語がいつ書かれたか、誰が書いたかがわからない。研究者泣かせなんです。

司会 平家物語を軸に、奥の深いお話をありがとうございます。

■古川薫氏略歴

日本文芸家協会会員・日本ペンクラブ会員。大正十五年下関市に生まれる。山口大学卒。教員・新聞記者を経て、昭和四十五年から文筆生活に入る。歴史小説・史伝、現代小説と多数。平成三年「漂泊者のアリア」で第一〇四回直木賞受賞。『高杉晋作』、『霸道の鷲・毛利元就』、『毛利一族』、『天辺の椅子』、『留魂の翼・吉田松陰』、『松下村塾』、『軍神』、『剣と法典』、『幕末長州藩の攘夷戦争』、『將軍慶喜と幕末の風雲』、ほか著書多数。

■砂川博氏略歴

昭和二十二年鳥取県生まれ。鳥取大学卒。北九州大学文学部講師、助教授、教授を経て、平成七年、相愛大学文学部教授。専攻は軍記物語を中心とする鎌倉・室町期の文学と芸能、一遍上人（遊行上人）と時宗教団を中心とする鎌倉・室町期の仏教史。著書・論文に『平家物語新考』、『軍記物語の研究』、『中世遊行聖の図像学』、『一遍と桜』『一遍聖絵』を読む（近刊）など多数。

源平合戦年表

年号	月	事項
治承4 (1180)	2	高倉天皇譲位。安徳天皇即位。
	4~5	源頼朝、木曾義仲に以仁王の平家追討の令旨がくだる。源頼政が反平家の兵を挙げ宇治平等院で敗死。以仁王流れ矢に当たり死亡。
	6	清盛が天皇、法皇、上皇を奉じて摂津福原へ遷都。11月京へ戻る。
	8	頼朝反平家の兵を伊豆に挙げ石橋山で敗れ、安房に走る。
	9	木曾義仲、信濃に挙兵。
	10	頼朝上総、下総、相模を従え鎌倉に入る。20日夜半、平家は水鳥の羽音に源氏襲来と驚き敗走。
	12	平重衡、反平家に与した奈良の東大寺、興福寺を焼く。
養和元 (1181)	2	平清盛死す（64歳）。
寿永2 (1183)	2	義仲、千曲川河畔の横田河原で平家方の城長成を破る。
	5	木曾義仲、越中倶利伽羅峠で平家軍を破る。
	7	義仲、京に進攻。平家は安徳天皇を奉じて西国へ都落ち。
	8	後鳥羽天皇即位。
	10	義仲、備中水島で平家に破れる。
	12	頼朝、弟の範頼、義経に命じ義仲討伐軍を進発。
	3	1 平家、一の谷の陣地を構築。 義仲、征夷大將軍になる。
元暦元年 (1184)	2	義仲、近江の栗田口で範頼、義経軍に敗死。31歳。 7 7日未明より源氏一の谷の平家を攻撃。義経が急坂より平家軍背後を攻撃。平家軍大混乱で海上へ敗退。
	9~11	源氏が山陽道の平家の拠点次々破る。
文治1 (1185)	1	範頼、豊後の臼杵・緒方兄弟の兵船82艘で豊後へ渡る。
	2	18日 義経ら150騎、暴風雨の中を阿波に上陸。 19日 朝、屋島の平家軍を急襲。平家は海上へ逃れ、21日海路、彦島へ走る。 22日 梶原景時ら源氏軍主力、屋島に到着。
	3	22日 三浦義澄、義経を長門の大島津に迎える。 23日 義経の軍船壇ノ浦奥津に到着。平家の軍船田野浦に集結。 24日 午前六時頃、平家が矢戦で攻撃開始。8時半頃から東流の潮にのり、源氏軍を満珠・干珠島辺まで急追。午後3時頃から西流に変わった潮にのり、源氏が平家軍を壇ノ浦に急追。知盛はじめ平家一門、次々に入水。二位の尼に抱かれ安徳天皇入水。宗盛捕らえられ、夕刻壇ノ浦海戦終わる。
	4	宗盛・清宗父子近江で、斬られる。
文治5 (1189)	4	(1189)義経、陸奥衣川館で討たれる（31歳）。
建久3 (1192)	3	頼朝奥州平定
	9	後白河法皇死す(66歳)。頼朝が征夷大將軍、幕府を開く。
正治1 (1199)	4	範頼、頼朝に殺される。
	1	頼朝死す（53歳）。

●司会・構成・文責

「博多・北九州に強くなろう」編集主宰

土居善胤

●発行

〒811-01 福岡市博多区博多駅前二丁目一番六号
西日本シティ銀行（広報文化部）
TEL 092・461・1869

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp

●平成10年7月31日発行 1・13・9

●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。

http://www.nbanc.co.jp